

臣清隆 不肖北海道開拓ノ任ヲ辱フセシヨリ以來
夙夜孜ミ犬馬ノ力ヲ盡シテ以テ報效ヲ圖ラント
欲スル茲ニ十年百事未々成ルト謂フ可ラスト
雖モ興業殖産ノ事ニ至ツテハ其基礎稍成リ
目的既ニ定ル其將來國家ノ鴻益ヲ興スヤ臣ノ
信シテ疑ハサル所ナリ 臣伏シテ惟ミルニ方今ノ形
勢積年國家内外多事財用不貲ノ後ニ際シ上國
帑ノ空耗ヲ憂ヘ下貨財ノ壅塞ニ困シム日一日ヨリ
甚シク其勢滔々乎トシテ底止スル所ヲ知ラサルカ如
シ財政ノ困難其レ是ノ如シ世ノ其原因ヲ論スル者其
說種々ナリト雖モ畢竟輸出入其卒ヲ失フニ外
ナラサレハ之ヲ救フノ道ハ輸入ヲ制シ輸出ヲ増シ以テ
其權衡ヲ得セシムルヨリ急ナルハナシ蓋シ目下民

生日ニ窮スト雖モ米價ノ騰貴ニ隨ヒ贏利ノ歸ス
ル所獨リ農家ニ偏重シ遐陬僻壤暴富ノ幸ヲ
得テ漸ク侈靡ノ端ヲ啓キ輸入品ヲ購求スル日ニ多
ク且従前粗食ノ民多クハ米ヲ以テ常食ト為スニ
至リ其濫費モ亦甚ク米價愈貴ケレハ農民ノ利
愈大ニ其侈靡ニ赴クヤ愈速カナリ故ニ輸入額ニ
増シ輸出ノ額益以テ減縮セシトス其此弊ヲ致
ス所以ノ者ハ地租改正石代上納ノ制行ハレシヨリ
米穀ノ權農民ノ手ニ落チ政府ノ實力以テ之
ヲ抑制スル能ハサルニ由ルナリ臣カ管内海産
稅ノ如キ從來現品稅ヲ課セシニ徃々金納ノ議
ヲ起ス者アリト雖モ尚舊貫ニ仍リ之ヲ改メサ
リシニヨリ方今稅品ノ價格物價ノ昂貴ニ隨ヒ大

ニ收入ヲ増スニ至レリ抑又本邦及ヒ清國ノ如キハ
人民治生ノ用米穀ヲ以テ本トスルニヨリ理財ノ法亦
之ニ由テ以テ斟酌スル所ナカル可ラス故ニ米價ヲ
平カニシテ以テ農民ノ偏富ヲ抑ヘ因テ輸入ヲ制
スルノ道早ク之カ計畫ヲ為サ、ル可ラス而シテ大
ニ國產ヲ興シテ以テ内外供用ノ途ヲ廣メ貿易ノ
利ヲ盛ニスルニ至テハ尤モ今日ノ緩フス可ラサル
者ナリ方今海内清晏干戈爭擾ノ變アルニ
非ス年穀豐穰水旱飢饉ノ災アルニ非ス今ノ
時ニ及テ全國ノ力ヲ擧テ興業殖産ノ道ヲ謀リ
能ク其目的ヲ定メ銳意勵精堅忍不拔以テ之
ニ從事セハ財政ノ困難ヲ挽回スル始テ期ス可キ
ナリ若シ徒ニ目前ノ小計ヲ務メ姑息ノ策ニ出テ

因循退守今日ヲ彌縫スルニ止マル片ハ輸出輸入
復々平均ヲ得ルノ期ナク國計ノ日ニ窘スル何ヲ
以テ之ヲ支ヘシヤ本年三月^臣意見ヲ太政大臣
三條實義右大臣岩倉具視ニ陳シ方今ノ急務
ハ勸業興産ニ在リトスル者ハ亦此カ為ナリ故ニ
臣益管内ノ物産ヲ興シ貿易ヲ盛ニシ出入其權
衡ヲ得セシメ以テ國家ノ富強ヲ資ケ其元氣ヲ補
ハント欲ス今當使着手セシ所ノ事業農穡牧畜
ノ如キハ北海道ニ於テ尤モ其盛大ヲ他日ニ期
ス可キ者ナリト雖モ未タ遽ニ其利益ヲ計量ス
ヘカラサルヲ以テ魚獸肉罐詰及ヒ煤炭掘採麥酒
釀造ノ業ニ就キ試二十年間ヲ積算スルニ其所收
ノ價金五千零六拾萬圓餘ニシテ益金九百萬圓餘

ヲ得ルニ至ルヘシ是レ固ヨリ多少ノ資金ヲ要スト
雖モ後來益其業ヲ擴充シ猶資金ノ額ヲ増ス
片ハ其得ル所モ亦隨テ多キヲ加フルハ論ヲ須タス
若シ此類ヲ推シテ之ヲ全國ニ比例セハ其利益
ノ大ナル豈ニ疑ヲ容レシヤ曩キニ

陛下屢勤儉ノ諭ヲ下シ宮中ノ用度ヲ減シテ天
下ヲ率勵セララル^臣

聖旨ヲ奉戴シ拳々服膺務テ冗費ヲ省キ鴻
益ヲ興シ以テ上意ニ副ハシテ圖ル謹テ^臣力任
内ノ事ニ就キ事業ノ大ナル者ニシテ從來施行
セル所ノ成績及ヒ將來ノ目的既ニ確立スルモノヲ
集メ別冊當使事業畧報ヲ錄シテ之ヲ上ル若シ
夫ノ詳細ナルハ明治十四年定額交付金了ノ時ニ及

テ條列奏陳セントス是レ唯其概畧ノミ敢テ自ラ方
 寄ノ任ヲ盡セリト謂フニ非ス目下財政困難ノ時ニ
 際レ興業殖産ノ尤モ當ニ急ニスヘキヲ思ヒ聊カ
 計畫ノ及フ所ヲ舉ケテ以テ
 聖鑒ヲ請フ伏シテ願クハ
 乙夜ノ覽ヲ賜ハコトヲ 臣清隆 誠惶誠恐頓首頓首
 以聞

明治十三年八月十一日 開拓長官黒田清隆

北海道著大物産十ヶ年間遞次増殖總計表

科目	數量	經費	收入	益
石附炭	一五七〇、〇〇〇	三六七、四四一	四八六、八八四	一一九、七五〇
鐘詰	四〇三、一八〇	三七三、三二二	四四八、二五五	七四、九三三
木材	一、三一〇、〇〇〇	二、二七〇、〇七〇	三、二七三、九八六	一、〇〇三、九一六
麥酒	五、七五〇、〇〇〇	五、四三三、三八八	九二〇、〇〇〇	三、七六六、二〇〇
葡萄酒	五、五一一、二五〇	一、五五二、五五七	二、三三一、一〇〇	六、七八四、三〇〇
養蠶製糸	四、六五一、一六六	二、九四四、七〇〇	三、一三九、五六六	一、九四八、六〇〇
麻苧	四、五八九、七六六	五、二二二、四九一	五、九六六、七三三	七、四二二、四六七
開干鱈	二〇、七〇〇、〇〇〇	八、九二〇、二〇六	一〇、三三五、〇〇〇	一、四七九、三六三
硫黃	九、五〇〇、〇〇〇	一、九〇〇、〇〇〇	二、一八五、〇〇〇	二、八五〇、〇〇〇
包布	二、一八〇、〇〇〇	四、四〇七、七一四	五、二三二、〇〇〇	一〇、九二二、八六六
菜糖	一、三七五、〇〇〇	一、〇八七、三二五	一、三三五、〇〇〇	二、八七六、七五〇
合計		六、四四七、三八〇	七、九三三、二二二	一、四八四、九四二

開拓使事業略報

附言

- 一 石炭科目へ礦車ヲ附記スルハ本表ノ題意ニ背クト雖モ專ラ石炭運輸ノ為ニ設ケ其經費採炭ト共計シタルニ由リ之ヲ區分シ難キヲ以テナリ
- 一 包布ハ起業ノ方法調査完了ニ付該費額別途交付ノ義ヲ稟請センカ為ノ現今大蔵卿ト協議中ナリ
- 一 甜菜糖ハ勸農局起業ニ係ルト雖モ其製造所當使管内ニ在テ甜菜ハ管下人民ノ作業ナレハ當使モ專ラ干渉スルヲ以テ茲ニ掲ルモノナリ
- 一 本村ハ笠野吉次郎ニ其伐採ヲ許可セシモノニシテ清國其他ノ海外へ輸出セシムルノ目的硫黃モ坑法ニ從ヒ人民私業ニ係リ且海外ニ輸出スルモノニシテ共ニ當使ノ大ニ干渉スル所タルヲ以テ茲ニ掲記ス
- 一 本表木材硫黃ニ石數ヲ用ルハ北海道ノ慣習ニ據ル其比例左ノ如シ

壹石 木材ハ壹尺立方ノモノ拾個ニシテ則チ拾キ
硫黃ハ四拾貫目

開拓使事業略報

開拓使事業略報

事目

沿革

勸農

移民

養蠶

麻苧

牧畜

漁獵

鹿

臘虎

漁業

鱈

開拓使

工業

電信

製造所

煤炭

罐詰

麥酒葡萄酒

木材

海陸運便

屯田

學事

開拓使事業略報

沿革概略

當使ノ創置ハ明治二年七月ニ係ルト雖氏歲額僅少ニ
 シテ大ニ為ス可アル能ハス明治四年中樺太開拓使ヲ
 北海道開拓使ニ併セ諸藩ノ支配地ヲ止メ同五年十ヶ
 年間一千万圓ノ定額ヲ附セラル、ニ及シテ始テ前途
 ノ目的ヲ立テ遠大ノ事業ヲ興スニ至レリ此レ當使事
 業略報ヲ編ムニ臨ンテ先ツ沿革ノ概略ヲ録スル所以
 ナリ沿革中事ノ勸農工業等各條ニ詳ナル者ハ必スシ
 モ此ニ掲出セス以テ簡略ニ從フ

明治二年七月開拓使ヲ置キ同月諸藩及士民墾夷地開
 拓ヲ乞フ者ハ土地ヲ分与スルノ令アリ八月蝦夷ヲ改
 メテ北海道ト稱シ分テ十一國八十六郡トス九月金貳

松万圓米奉万石ヲ當使ノ歲額トシ臨時却出方金拾七
万圓樺太外務費金奉万三千六百圓ヲ交付セラレ十一
月本廳ヲ札幌ニ經營ス後該廳下市街ニ移住スル者ニ
家作料ヲ貸与ス三年正月松前江差兩港館藩ノ沖ノ口
改所ヲ當使ニ屬シテ函館等ト同ク海關所トス二月樺
太開拓使ヲ置キ從前ノ歲額ヲ廢シ更ニ金拾三万圓米
奉万石ヲ北海道開拓使歲額ト定ム三月通商司所轄ノ東京大
坂兵庫敷賀堺五ヶ所ノ函館產物會所當使ノ所轄トナ
ル四年六月黒田開拓次官米人ホーレシケフロン以下
三名ヲ聘シ米國ヨリ歸朝ス尔後外國人ヲ雇役シテ農
工業及學事等ヲ補助セシムル若干名八月樺太開拓使
ヲ北海道開拓使ニ合併ス同月諸縣並華士族寺院ノ支

配所ヲ免シ當使ノ管轄トセラレ是月米ル明治五年ヨ
リ從前ノ歲額ヲ廢シ更ニ十年間千万圓ヲ總額ト為
テル十一月當使定額金等ノ内ヨリ貨幣五拾万圓ヲ準
備金トシ貳百五拾万圓ノ兌換證券ヲ製造ス東京大坂
函館ニ貸付會所ヲ置キ產物為換用達ヲノ貸付ノ事ヲ
管セシメ人民營業資金融通ノ道ヲ謀ル十二年一月ニ至リ之ヲ開ス
五年正月管内ノ產物外國貿易ヲ除クノ外三年間海
關所輸出入税ヲ免ス是月東京大坂敷賀堺那珂撫養下
ノ關ノ北海道產物會所ヲ關ニ從來產物賣買ノ代價ニ
賦課セシ歩合金ヲ廢ス九月北海道ヲ分テ六大部トナ
シ札幌ヲ本廳トシ函館根室浦川宗谷後留萌樺太ヲ支
廳ト定ム後樺太八千島州ト交換セラレ浦川留萌ハ廢
シ現今存スルモノ函館根室ノニ支廳ニシテ東京ニ出

張所ヲ置ク如故同年十二月元館縣地方當使ノ所轄トナル此時ニ至テ北海道全ク當使ノ管内ニ歸ス是歲戊辰己巳ノ際兵燹ニ罹リシ函館人民ハ金貳万五千圓餘ヲ賑給ス是歲又各支廳長官等ヲ札幌ニ會シ將來開拓事業施設ノ方法ヲ議セシム六年函館砲臺及五稜郭陸軍省ノ所轄トナル七年臺灣事件ノ節定額内金松万圓ヲ還納ス是ヨリ前米人アソクセルヲ各処ノ鑛山ヲ檢査セシメ尋テ米人テイマン及モンロー等ヲシテ全道ノ地質鑛山ヲ檢査セシメ又米人ウツソシ及テイ等ヲシテ三角術ヲ以テ全道ノ沿海及山河ヲ測量セシム是年一月函館裁判所ヲ置カル八年二月曩ニ三ヶ年間停止セシ海關稅期滿タルヲ以テ人民興益ノ為メ北海道諸產物出港稅則ヲ定ム七月函館稅關大蔵省ノ所轄

トナル是歲十月露領クリル諸島ヲ以テ我樺太ト交換セラレ該島ヲ當使所轄トセラル從前本廳下ニ在ル俵米是ニ至リ大ニ其石數ヲ數所ニ増テ常平倉ト為ス九年五月北海道物産縱覽場ヲ東京出張所内ニ設ク是ヨリ先キ本支廳所轄各郡出張所ヲ廢合シ是ニ至テ總テ分署ト改稱ス七月

聖上奧羽御巡幸ノ際函館ハ御著艦御上陸アリ八月大臣奏議巡視トシテ函館ヨリ札幌ニ至ル九月北海道大小區畫ヲ定ム十二月北海道ノ地租地價百分ノ一ニ定ラル十年一月准陸軍武官ヲ除クノ外大判官以下ヲ廢シ更ニ官制月俸ヲ定メラル是月十年以降定額金ノ内貳松万圓宛減セラル續テ又定額百分ノ五ヲ減セラル十一年從前漁業資本貸与法ノ外人民ニ營業資本金貸

与ノ法ヲ設ケ融通ノ便ヲ開キ又續テ家作ノ粗造ナル
カ為ノ健全ヲ害スルヲ以テ其家作ノ改良費貸与ノ法
ヲ設ク是歲九月札幌裁判所ヲ置クノ布告アリ十一
月函館大火金拾万圓餘ヲ以テ道路家作改良ノ事ヲ施
行ス是歲又本支廳各官衙所用ノ燈油ハ外國輸入ノ石
油ヲ用フルヲ禁シ種子油魚油等内國産ノモノヲ用ヒ
シノ續テ燧木モ一切外國品ヲ用フルヲ禁シ函館懲役
場ニ於テ製造スルモノヲ用ヒシム十二年一月札幌本
廳焼失ス七月郡區編制法ヲ定メ郡區役所ヲ開クニ依
リ前ニ置ク所ノ分署ハ渾テ之ヲ廢ス十二月又函館大
火金貳拾万圓餘ヲ以テ道路家作改良ノ事ヲ施行ス十
三年六月物産取扱所ヲ東京府下ニ設置シ北海道物産
ヲ興隆スルヲ謀ル今十三年度管内國稅ヲ豫算スルニ

總額金七拾万三千百八拾九圓餘ナリ置使ノ年明治
二年十月ヨリ三年九月迄壹ケ年ノ租額金拾四万三千
五百四拾貳圓餘洋銀三千五拾五弗八拾七セントル
ガル貳拾枚ノ高ニ比スレハ亦其進歩ノ一斑ヲ見ルベシ

明治五年十一月東京ニ官園ヲ置キ
之ヲ北海道ニ移シ氣候ノ適否ヲ察シ以テ全道勸農ノ方
ヲ謀ランカ為メ六年渡島國七重村ニ勸業試驗場ヲ設ケ
後札幌ニ官園ヲ置キ而シテ七重札幌兩官園ニ於テ栽植
スル所ノ果樹穀類ノ苗實等ヲ人民ニ分与シ之ヲ全道ニ
蕃殖セシメントス今葡萄林檎大小麥ノ四種ヲ舉ケテ試
ニ之ヲ豫算スレハ十ヶ年間遞次増殖スルヲ別表ノ如ク
ニシテ其益不少又穀菜類ノ内麥麻甜菜藍等ノ如キハ
最モ地味ニ適スルヲ以テ既ニ大ニ蕃殖セシムルノ方
ヲ謀レリ此他勸農上ノ見ルヘキモノ移民牧畜等ハ之

勸農

勸農ハ開拓事業中ノ最モ要ナル者ニシテ牧畜種植ハ農
業ノ本タリ此ヲ以テ明治五年十一月東京ニ官園ヲ置キ
徧ク内外各國ノ良種ヲ收集シ養栽植ノ方ヲ試シ漸次
之ヲ北海道ニ移シ氣候ノ適否ヲ察シ以テ全道勸農ノ方
ヲ謀ランカ為メ六年渡島國七重村ニ勸業試驗場ヲ設ケ
後札幌ニ官園ヲ置キ而シテ七重札幌兩官園ニ於テ栽植
スル所ノ果樹穀類ノ苗實等ヲ人民ニ分与シ之ヲ全道ニ
蕃殖セシメントス今葡萄林檎大小麥ノ四種ヲ舉ケテ試
ニ之ヲ豫算スレハ十ヶ年間遞次増殖スルヲ別表ノ如ク
ニシテ其益不少又穀菜類ノ内麥麻甜菜藍等ノ如キハ
最モ地味ニ適スルヲ以テ既ニ大ニ蕃殖セシムルノ方
ヲ謀レリ此他勸農上ノ見ルヘキモノ移民牧畜等ハ之

ヲ各項ニ掲ケ其成績ヲ見ス下左ノ如シ

移民

明治二年十一月當使管内在留無産ノ士族方向ヲ定メ
民籍編入可願出旨勸諭ス又北海道へ移住スル者へハ
家作料農具并ニ三年間衣食ノ資ヲ給シ墾田一段毎
ニ金貳圓ヲ与ヘ又自費移住ノ者へハ金拾圓ヲ与ヘ七
ケ年間除租等ノ法ヲ制定ス三年三月仙臺藩士伊達藤
五郎家臣三百四十餘人ト共ニ膽振國有珠郡ニ同石川
源太家臣八拾餘人同國室蘭郡ニ移住ス五月高知藩ヨ
リ八十餘人ヲ同國勇拂千歳ニ郡ニ又陸羽ヨリ農民七
百二十餘人ヲ募リ札幌ニ移住セシム九月仙臺藩士片
倉小十郎家臣等六百人札幌等へ移住ス是ヨリ前後東
京府下ノ人民ヲ根室宗谷及樺太へ肥後國天州ノ人民

百六十七名ヲ日高國浦川郡へ移住セシム五年二月仙
臺藩士伊達藤五郎元家臣五百拾餘人膽振國有珠趾田
二郡ニ同伊達英橋元家臣百七拾餘人ト共ニ石狩國當
別村ニ移住ス七月淡路國舊領主稻田九郎兵衛家臣ト
共ニ日高國靜内郡へ移住ス後勸奨ノ為藍麻製造取扱
規則ヲ定ム十二月舊會津藩ノ降伏人七百餘人ヲ余市
郡其他各所ニ歸農セシム七年七月從前施行セル給与
ノ方法ヲ改メテ移住農民給与規則トシ送籍移住ノ者
へハ家作料及農具等ヲ給与スルノ方法ヲ設ク八年十
月樺太交換ニ際シ土人八百五拾人ニ厚ク扶助ヲ加ヘ
石狩國對雁村ニ移住セシム是ヨリ先明治三年中東京
府ヨリ樺太へ移リシモノ若干ヲ小樽郡ニ移住セシメ
同五年中佐賀藩ヨリ釧路國へ移住セシモノ若干ヲ札

愧へ轉住セシム十一年一月七年以来本廳管下ニ施行
セシ農具貸与概則ヲ開墾略則ト改正ス六月愛知縣士
族若干名ツ、ヲ膽振國山越郡へ逐年移住ノ義從一位
徳川慶勝出願ニ付聽可ス此年八月千島州占守郡土人
元露國 二十二編籍ス十二年四月舊仙臺藩士伊達邦
所屬 直舊林 英橋ノ舊家臣二百名餘陸前國ヨリ當別村へ移住ス
同月移住民渡航順序ヲ定メ當使附屬船へ乘込ニ北海
道へ送籍移住スルモノハ船賃ヲ徴收セサル等ノ方法
ヲ設ク十一月高知縣士族仁木竹吉ノ發起ニテ同縣下
ノ士民四百三十人ヲ余市郡ニ移住セシム十三年三月
舊仙臺藩士伊達邦成舊林藤ノ舊家臣宮城福島兩縣下
ノモノ人負三百八十九人有珠郡へ移住ス是ヨリ先キ
岩橋輟輔ノ發起ニテ函館ニ開進社ヲ設立シ各府縣下

有志ノ人民ヲ募リ移住セシムル旨出願ニ付聽可シ己
ニ若干ノ地ヲ割渡シ華族毛利元徳鍋島直大等舊臣授
産ノ為ノ土地拂下ノ義ヲ出願シ其他華士族中同シク
願出ルモノアリ以上陳フル所ハ勸誘ノ効ニ依リ一時
多數募移或ハ自移スルモノ、概略ヲ記スル所ニシテ
其成績ノ如キハ今之ヲ縷述セスト雖此現況ヲ以テ
推算スルハ八人烟ノ増殖スルヤ年ヲ期シテ俟ツベシ
依テ掲クルニ明治四年以来ノ戸口比較表ヲ以テス

札幌官園 七重勸業試驗場 十ヶ年遞次増殖見込表

種類項目	栽植段別	経費	收穫高	收入金	益
葡萄	七三三七九 _反 八〇四	八七八八三 _反 七二〇	一六八七九 _反 五〇〇	一九九、九五〇 _反 〇〇〇	一一二、〇六六 _反 二八〇
林檎	一〇七四八 _反 六六〇	一八、五五二 _反 九七二	七七一三 _反 八五	二三四、二六七	五、八四九 _反 六四四
大麥	二七〇九 _反 三六	六四七 _反 八一〇七八	一七、二五七 _反 〇五三	六九、七〇九 _反 一六〇	四、九二八 _反 〇八二
小麥	七一八 _反 六〇九	一七、四六四 _反 八九三	三七、六五〇 _反 五二	二、六五六 _反 五七八	四、一九一 _反 六八五
合計	一八四、二九四 _反 三二九	二、四一六 _反 八二六六三	一七六、五〇八 _反 二八五 _反 二〇、七二二 _反 一〇五	三、三一五 _反 七一八 _反 五五五	一、七四〇、三五 _反 六九一

此表は、官園七重勸業試験場において、十ヶ年間に亘り、葡萄、林檎、大麥、小麥の各作物の増殖見込を示すものである。栽植段別、経費、收穫高、收入金、益の各項目について、数字を記載し、その増殖の傾向を明らかにする。

葡萄の栽植段別は、七三三七九_反八〇四であり、経費は八七八八三_反七二〇、收穫高は一六八七九_反五〇〇、收入金は一九九、九五〇_反〇〇〇、益は一一二、〇六六_反二八〇である。

林檎の栽植段別は、一〇七四八_反六六〇であり、経費は一八、五五二_反九七二、收穫高は七七一三_反八五、收入金は二三四、二六七、益は五、八四九_反六四四である。

大麥の栽植段別は、二七〇九_反三六であり、経費は六四七_反八一〇七八、收穫高は一七、二五七_反〇五三、收入金は六九、七〇九_反一六〇、益は四、九二八_反〇八二である。

小麥の栽植段別は、七一八_反六〇九であり、経費は一七、四六四_反八九三、收穫高は三七、六五〇_反五二、收入金は二、六五六_反五七八、益は四、一九一_反六八五である。

合計の栽植段別は、一八四、二九四_反三二九であり、経費は二、四一六_反八二六六三、收穫高は一七六、五〇八_反二八五_反二〇、七二二_反一〇五、收入金は三、三一五_反七一八_反五五五、益は一、七四〇、三五_反六九一である。